

オフィスビル総研レポート

Forum Report

都市の記憶 出版記念フォーラム

『都市の記憶を楽しもう！』

司会進行

阿川佐和子氏（文筆家）

パネリスト

鈴木博之氏（建築史家）

藤森照信氏（建築家・建築史家）

増田彰久氏（写真家）

小澤英明氏（法律家）



2007年6月18日開催

株式会社オフィスビル総合研究所

JUNE/2007 Commercial Property Research Institute, Inc.

都市の記憶 出版記念フォーラム『都市の記憶を楽しもう！』

日時：2007年6月18日(月) 18時～21時

会場：和田倉噴水公園レストラン(100名参加) 東京都千代田区皇居外苑



共著者： 増田彰久氏(写真家)

鈴木博之(東京大学大学院教授、建築史家)

小澤英明(法律家、弁護士)

ゲスト： 藤森照信(東京大学教授、建築家、建築史家)

司会進行：阿川佐和子氏(文筆家)

主催： 株式会社オフィスビル総合研究所

代表取締役 本田広昭

主催者あいさつ

本田広昭

お忙しいところ、ご来場いただきましてありがとうございます。
ございます。

本日は、都市の記憶シリーズの第三作目になります「日本のクラシックホール」の出版記念イベントなのですが、初めての方もいらっしゃると思いますので、その出版に至るまでの経緯を少しお話しさせていただきます。

私はオフィスビルのビジネスに携わるものとして、都心から歴史的な建物が次々となくなってしまうのはどう



してなんだろうと考えておりました。都市部に現存する歴史的なオフィスビルを調べ始めて、明治生命館、三井本館と研究していくうちに、本書の共著者のおひとりであります建築史家の鈴木博之先生と出会ったのです。そして、みなさんが歴史的建築物の保存活動に熱心に取り組まれているのを知り、少しでもお役に立ちたいと思い、第一作目の「都市の記憶～美しいまちへ」出版に至りました。

本書では、増田彰久先生の美しい写真を通じて保存に強い想いを感じていただき、弁護士の小澤英明先生に、毎回、保存のための具体的な提案・提言をしていただいています。1冊目はオフィスビル、2冊目は駅舎とクラシックホテル、そして3冊目にあたる今回はクラシックホールとなりました。

今日は、2冊目の発行記念のシンポジウムと同じ皆様にお集まりいただきましたので、みなさん、ぜひ最後までお楽しみください。



阿川佐和子

この前のシンポジウムのときもそうだったのですが、今日も私は、建築に関して唯一の門外漢として参加させていただき、何がなんだか全然わからないのですが(笑) 増田さん、鈴木さん、小澤さんのご三方が第三弾目となる本を出版され、さらに藤森さんも加わってお話しいただけるとのことなので、それを通し、日本の建築や文化がどんな方向に行ってしまうのか、あるいは行くべきかといったテーマについて多くの方々に考えていただければ幸いです。



最初に、著者の方々に、この本の主旨、感想、そして、どれくらい売っておつもりなのかといった皮算用まで（笑）お話しいただきたいと思います。では、増田さんから。

増田 彰久

皮算用ですか（笑）。このシリーズは、およそ普通の出版社ならOKしないだろうというテーマを続けておりました、私たち自身、1冊目のオフィスビルの本を出したときには「絶対、売れないだろうなあ」と思っていたにもかかわらず、けっこう売れちゃったんですよ。で、勢いがついて駅舎とクラシックホテルの本をつくったら、これもまあまあよかった。じゃあ次にどうしようとなったとき、人が集まる建物はどうだとなって、出版にこぎつけたのが今回の作品です。

もちろん類書はありません。類書がないというのは、これはもう、考えに考え抜いて「売れないから」という判断があったともいえるし、逆に前例がないからこそ、もしかしたら大当たりするかもと、これは私たちというより出版社が考えたのですが、そんなこんなで無事に本になりました。

ただ、クラシックホールというのは少し定義が難しく、とりあえずこの中には公会堂や学校の講堂、さらに国会議事堂や劇場まで、とにかく人の集まる場所を入れました。実際に手にとっていただければ、なんとなくそのカテゴリーがおわかりになるのではないのでしょうか。



阿川

写真を撮られて、それを並べたり眺めたりしたときに、「日本のクラシックホールというのはこうなんだなあ」という感想はございましたか？

増田

難しいですねえ。実をいいますと、今回、クラシックホールに入れた建物を、僕はこれまであまり撮っていなかったのですね。それでほとんどを撮り下ろしてわかったのは、戦前に建てられたようなホールが今でも現役として使われているというケースが本当に少ない。ひどい状況に置かれたものも多くて、困ったという状況です。

写真を見ていただくと、けっこうきれいに撮れているのですが、実態はかなりボロボロというものもございます。その辺の話も、今日は写真をお見せしながらいたします。

阿川

では、スライドを見せていただくまえに、他の著者の方にも。鈴木先生はいかがですか。

鈴木博之

この本で3冊目ですが、いつも通り、増田先生の写真が揃っているかどうかで成立する企画ですので、1冊目は本当に楽しくまとめさせていただきました。そして第二弾をどうしようかとなったときに、駅舎とホテルというテーマでもちゃんと1冊になったものですから、じゃあ次はなんだ、と考えたのがクラシックホールです。



阿川

つまり、三匹目のドジョウですね。

鈴木

そうですね（笑）。そうすると、まだまだ新しいテーマはあるはずだという気にさせてくれます。

それで、ただの三匹目にならないように、今回の本の楽しみ方のポイントを紹介したいと思います。ホールというのは、外観だけでなく中を撮らなければわからないのですが、増田先生の写真は、その建物の特徴がいちばんわかるように工夫されて撮っています。写真家には、対象物を劇的に伝える人とか、報告書の記録写真のように撮る人などがいるんですけど、増田先生の場合は、もっともケレン味なく建築を表現されているのですね。

たとえば、あるホールは正面から舞台に向かってまっすぐ撮っている、あるいは舞台と客席を7：3のバランスで撮ったり、真横から撮ったり、さまざまです。僕はそれを見るにつけ、増田さんがそのホールの個性をもっとも引き出そうとしていることがわかるわけで、みなさんもそういうところに着目してページをめくっていただければおもしろいのではないのでしょうか。

阿川

なるほど、写真だけでもいろいろあるんですね。それでは、並び順で次に藤森先生に一言いただきます。

藤森照信

今回、本を見せていただいておもしろかったのは、138ページの一橋大学の兼松講堂と、229ページの神戸女学院大学の記念講堂が、こんなに似ているとは思わず、驚きました。しかし、一橋は伊東忠太 神戸はヴォーリス



と、まったく違う人生を生きた人の設計なのに不思議ですね。どうしてなんだろう。

阿川

それは、片っ方が片っ方の真似をしたってことはないですか？

藤森

それはないでしょう。時代は重なっていても、もし会ったらお互いにそっぽを向くような関係でしたから（笑）。しかもヴォーリズはキリスト教の宣教師だし、伊東さんは本願寺なんかに近い人で、まったく文化背景も違うんですよ。

まあ、それだけなんですけど（笑）、改めておもしろいなあと気づかせてもらいました。

阿川

あ、それが感想ですね（笑）。藤森先生、ときどき話が暴走するんでついていけないときがあります（笑）。それでは小澤さん。

小澤

これで3冊目ですが、最初の本のときは美しい歴史的建築物がどんどんなくなる状況にどうしたらいいかと考えました。もちろん保存したいという人はいっぱいいますが、具体的にどんな方法があるかわからない。オフィスビル総合研究所の本田さんと話し合った結果、理想的な制度をもった架空の国を登場させ、見聞記というかたちで議論の糸口を示させていただきました。2冊目では、現実の日本でクラシックホテルが壊されそうになったとき、どうやって法的対応がとれるか、これも架空の話で展開してあります。

そして今回は、もっと現実的に、歴史的建造物を残すためのお金をどうやって調達するか、どういう仕組みがあるのか、書かせていただきました。



阿川

ありがとうございます。それでは増田さんに戻りまして、スライドを紹介しながら実際のクラシックホールについて解説していただきます。

増田

わかりました。最初は旧函館区公会堂です。

阿川

その前に確認しておきたいのですが、今回、紹介されているホールは、すべて現存するものですか？

増田

現存しています。また、とりあえず、すぐに壊される予定のものもありません。

では函館の公会堂ですが、このような公会堂は、お金持ちの寄付によって建設されたものが多いんですね。ここも、相馬哲平さんという豪商の寄付によるものです。



藤森

これはですね、その前に北海道庁が函館の役所をつくったんですよ。それに対抗して相馬さんがお金を出して建設したものです。函館っていうのは、明治維新のときに新政府側と幕府側が戦争をしましたよね。そして幕府側についていた商人がその後も実権を握っていたわけです。それだけに、道庁が丘の上に役所を建てたのに反発し、それよりちょっと高い場所にこれをつくりました。だから間近でみると、こっちのほうが目立つんですね。

当時の函館では、このように明確な市民運動が、政府への嫌がらせというかたちで起きていたみたいですね。

だから、この色についても、僕は最初、疑問に思っていたんですよ。こんな、なんとかランドミみたいな派手な色にはしないだろうと考えた。ところが調査したときに文化庁の人に聞いたところ、もともとこういう色だったそうです。それだけ目立つようにしたかったのでしょうかね。

おそらく、そのころのカリフォルニアに似たようなスタイルがあったのでそれを参考にしたのだと思いますが、木造でこんなに派手にペンキを塗った建物はめずらしいです。

阿川

たしかに、新築と見まちがうほどの色ですね。昔のものとは思えない。

鈴木

ただ色についていえば、昔のウェッジウッドの陶器なんかもかなり派手ですし、ヨーロッパのロココから、そのあ



との宮殿、ペテロブルグなんかもこんな感じなので、特に変わっているというわけではないんですよ。

増田

それでは内部の写真に移ります。これはかなり広い空間で、木造でこれだけのものをつくるのは大変だったのでしょうか。

藤森

おそらく、ヨーロッパのトラスの技術を用いているからで、江戸時代だったら天井高は11メートルが限界だといわれていましたから、まちがいなく洋風建築なんです。

阿川

天井の高さはどれくらいですか？

増田

そんなには高くないんですけどね。

あと、この公会堂には貴賓室がありまして、公会堂は市民のものであると共に、やんごとなき方もご招待したのでしょうか。

鈴木

こういう貴賓室は、そういう必要があるときに増築するもんなんですよね。地方の西洋館って迎賓館の役目を果たし、天皇は明治以降の日本を西洋化する装置としての機能も果たしていたので、そういう関係でつくられたのだと思いますね。



阿川

ここは現在でも公会堂として使われているのですか？

増田

普通にイベントなどに使ってるみたいですよ。貸し出しして。

それでは次に、旧山形県会議事堂を紹介します。県庁舎の隣にあるちょっとおとなしい建物ですが、この中の撮影はちょっと大変でした。といいますのも、撮影許可はおりたものの、そこで「照明を点けていただけますか？」とお願いしたら、「それには電気代払って

いただかない」という。まあ、税金で運営しているものだからそれはしょうがないとOKし、次に「舞台も明るくしたいのですが」といったら、「それは別料金です」となる(笑)。大変なんだなあと思いました。なので、この写真はけっこうお金がかかっています。

しかも、照明を点けるには係の人を呼んでもらわなければならない、すぐ30分、40分かかり、時間もかけています(笑)。

阿川

それだけ管理がしっかりしているということなんですね。

増田

まあ、そうなのでしょうね。管理をしている方は非常にこの建物を愛しているようで、なんとかいい写真を撮ってもらおうと、一生懸命、私たちのお世話をしてくれました。

鈴木

この建物の場合、重要なのは内部なんですね。なので、こうやってきれいに修理されていますが、これは日本の建物修理の歴史の中でもけっこう記念となる作業で、すべて外側だけで済ましています。

普通、古い建物は補強するために、内部に柱を足したりいろいろするのですが、ここはそれを外に集中させ、内部のデザインを守った。これは画期的なことです。だから、外側の裏のほうはかなりすごいことになっています。

増田

その辺は、外観写真でも見えないように撮っています。

鈴木

建築的にいえば、カッコつけるゴシック的補強といえますね(笑)。

増田

先を急ぎます。次は郡山市公会堂です。

こういう市民ホールができたところはそれだけ市民の意識が高かった証拠で、立派ですね。中もきれいで、今でも市民に開放されています。しかもどんなふうにも使えるように改修されています。

次は国会議事堂です。ここがクラシックホールに入るかどうか微妙なのですが、



衆議院の本会議場を見てください。

阿川

ここはテレビの国会中継などでもおなじみですね。

鈴木

この写真が、まさに7：3で撮っていますね。これはどうして？

増田

うーん、斜めに接するというのが僕の国に対する姿勢ですかねえ（笑）。

阿川

斜に構えている？

増田

そうかなあ（笑）。

あと、本会議場は参議院のほうが立派なので、普通の建築写真ではそっちが紹介されることが多いのですが、僕は衆議院のほうがメジャーなのでこっちを中心に撮りました。

阿川

次は日比谷公会堂ですね。



増田

これは早稲田大学の大隈講堂なども設計した佐藤功一さんの作品です。中はかなり手が入っているものの、唯一残っているのは、舞台の袖の左右に丸く見えるものは建築当時からあります。資金を寄付した安田善次郎と、企画した後藤新平の像がはめ込まれています。

阿川

建物のおもしろみはどこにありますか？

藤森

佐藤功一さんというのは顔が六角形だったんですよ。だから、全体に角がシャープですね。

阿川

建築家の顔と作品のデザインは似ているんですか？

藤森

だと思いますよ（笑）。

何しろ佐藤さんのあだ名はヘキサゴン（六角形）で、これはけっこうめずらしいと思うのですが、日比谷公会堂の外観もそんな角がぴしっとした感じになっている。

もっともこれは私が主張してるのではなく、当時の同級生たちがそうっていたという記録があるんですね（笑）。

阿川

へえ————。頭にしっかりインプットされました（笑）。

では、次は歌舞伎座ですね。

増田

ここは岡田信一郎さんの設計で、歌舞伎座としては三代目です。中はけっこう変わっていますが、外はそのままですね。

ただ、今、取り壊されるということで、取材中もそれを気にされてました。

阿川

それは老朽化で。

増田

えー、まあ、そうなんです、そのあたりは難しい問題ですね。

阿川

個人的には歌舞伎座は銀座の顔だし、外国人観光客もここに来ると日本に来たと実感するそうなので残念ですね。



増田

藤森先生、歌舞伎座は昔からこういう和風なデザインだったのですか？

藤森

いいえ違います。明治に建てられたときは洋風でした。歌舞伎の改良運動みたいなのが

盛んで、その影響があったからでしょう。そして次に木造の和風になり、震災後に今の建物になっています。これは岡田さんが桃山風ということ意識して設計したそうです。なんで歌舞伎が桃山風なのかわかりませんが。出雲の阿国とかと関係あるのかなあ。

しかし、明治生命と同じ人の設計というのもおもしろいですね。

増田

それと、建物とは全然関係ないのですが、歌舞伎座っていう名前がすごいですよね。要するに「映画館」っていつてるのと同じなんだから。

阿川

いわれてみればそうですね（笑）。馴染んでいるので気づきませんでした。

藤森

たしかにそうだね。松竹が経営している民間施設なのに。（一同、感心の声）

増田

すいません、関係ない話で（笑）。

次は東京大学の安田講堂です。ここも日比谷公会堂の安田善次郎の寄付によるものですね。

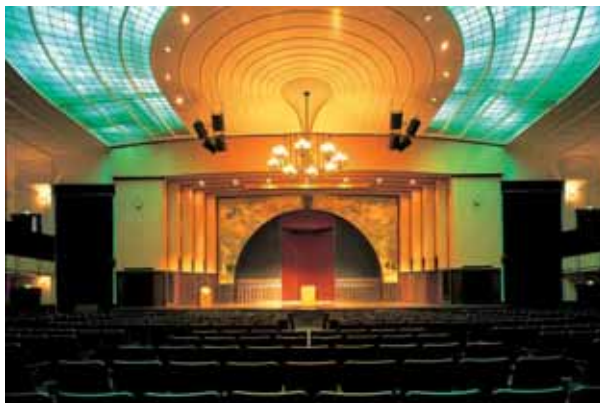


鈴木

この写真はけっこう不思議で、今、安田講堂のうしろには巨大な医学部の校舎と高層マンションが建っているものですから、最初にこれを見たとき、10年くらい前の写真だと思って増田先生に聞いたんです。すると最近のものだという。この位置、たった一点だけ、うしろの建物が隠れる場所があるっていうんですね。

増田

建物の写真撮ってる時、僕は建った当時のかたちをできるだけ再現したいと思ってまして、安田講堂の場合は並木から近づいていきますと、ここしかないというポイントがあったんです。左右に30センチずれてもうしろの建物が見えちゃう微妙な位置なんですね。決して合成で



消したわけではありません。ですから、みなさんも、今のうちならこういう写真が撮れます。
ここは第一回の有形登録文化財になっています。

阿川

私は入ったことはないんですが、時計台のどこまで上れるんですか？

鈴木

今はだめですね。私は昔、上りましたが。

ところでこの内部のホールですが、小杉未醒の描く日本では非常にめずらしい大きな壁画が写っていて立派に見えるものの、実際にはこんなにきれいではありません（笑）。

阿川

写真だと本当に生き生きとした絵に見えますが。

増田

次は早稲田大学の大隈講堂で、今年は創立 125 周年とかでいろいろなイベントが企画されています。大隈さんは人生 125 年、養生していればそのくらい生きられるとっていたものですから、早稲田にとっては意味のある数字になっているようですね。もっとも、大隈さん自身はもっと早く亡くなっています。

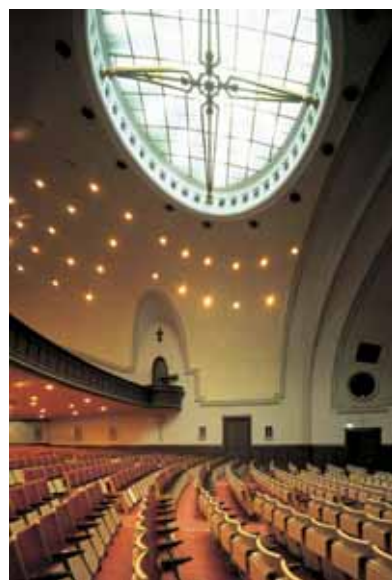
いろいろ修繕はしているものの、タイルなんかはどうしても色が合わない部分があり、こういうのは難しいんだなあと感じます。

阿川

藤森さん何か？

藤森

中を見せてもらえますか。ああ、やっぱり見事ですね。天井のステンドグラスが時計みたいなデザインだな。



阿川

方位磁石のようでもあります（笑）。

増田

次は内部だけの紹介ですが、日本女子大学の成瀬記念講堂です。

藤森

キリスト教の教会みたいだね。でも日本女子大学ってミッション系じゃないのに。

鈴木

この建物は非常に不思議な壊れ方をしていて、外側の煉瓦の部分はぱっさりなくなっちゃったのに中だけが残りで、今、それを修復して使われています。

いわゆるハンマービームという中世のヨーロッパでいちばん手の込んだシステムが、おそらく今の日本でもっともよくわかる建物ではないでしょうか。

阿川

ハンマービーム？

鈴木

上の木組みを見てもらえばわかるように、ちょっと横に行っては上に行き、という構造で支えるようになっています。横木がハンマーのように見えるのでこう呼ばれています。

増田

ここは田辺淳吉さんという人の設計で、学校を出て1年目くらいにつくっているのですが、すごいなあと思いましたね。当時の教育は立派だったんですね。

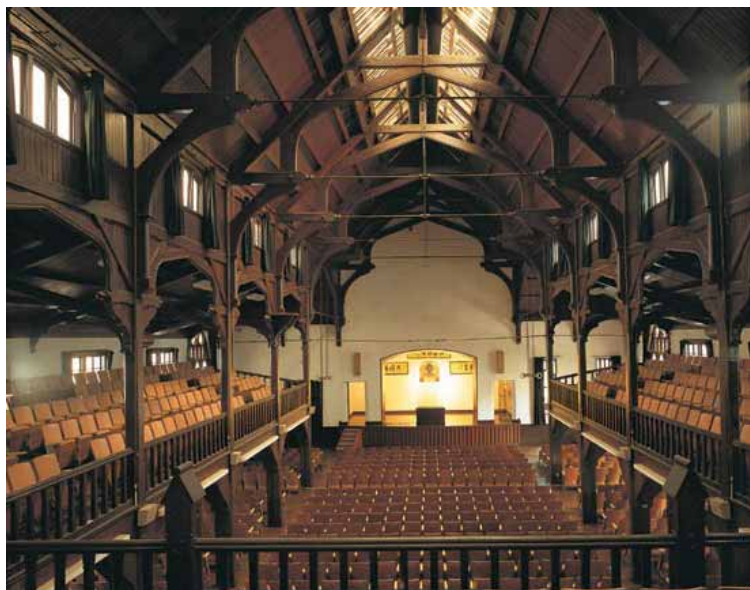
もっとも、最近、別の人の作品だったのではないかという説もあるんですが（笑）。

藤森

今でも大学院生ならこれくらいできると思うんだが……。

鈴木

ただ、田辺さん、これができたころには他の仕事をしていたので、やっぱり、違う人のものじゃないかという説はありますね。そのあたりは慎重に考えないと。



阿川

そんな建築史上の重要なテーマをここで語られても（笑）。でも、ハンマービーム工法ってのは他にも例があるんですか？

鈴木

現代建築では大江宏さんって方が角館樺細工伝承館というのをつくってまして、あれは古い建築のパロディなんですけどね、いずれにしる中世には木造で大きな空間をつくろうとすると、こうやって持ち送りで二段構え三段構えにしなければならなかったわけで、これ自体はめずらしいわけではありません。

増田

これ、刑務所なんかでも使っていませんか？ 千葉刑務所とか。

藤森

千葉刑務所はちょっと似ているね。

増田

網走にもあったような。

鈴木

今、思い出したんですが、シンガポールのラッフルズホテルなんかかそうですね。



阿川

ああ、なるほどね。

増田

次は東京女子大学です。講堂と教会が背合わせになってます。

続いて慶応大学の三田演説館です。

阿川

これは私も在学中によく見ていました。一見、お蔵み
たいなんですよね。



藤森

この外壁はなまこ壁で、日本の伝統的な蔵のつくり方ですが、ここでは洋風の窓とうまくあって、しみじみいいものだと思いますね。

なまこ壁使ったり、お蔵っぽい建物で失敗作ってないんですね。こういうふうにつくるとだいたい大丈夫。日本でお蔵を見て、これはデザイン悪いという建物に出会ったことがありませんから（笑）。倉敷の街が美しいのは、全部、お蔵だからです。

阿川

設計者は不詳なんですね。

藤森

設計図がアメリカから福澤諭吉さんのところに送られ、それをもとにつくったというところまではわかっていますが、それ以上は記録にありません。なまこ壁のところとかは大工さんがやったんだと思いますけどねえ。

増田

内部を撮影して思っただんですが、最初はここにある椅子は置かれてなかったのではないかという気がしました。というのは窓の位置が低く、昔は正座していたのではなかったかと。そうやって演説を聞いたのでしょうか。

続いては星薬科大学です。

阿川

星薬科だから天井は星のデザインなんですね。

藤森

ああ、それで星にしたんだ。

阿川

え？ 普通、気がつくでしょ（笑）。

藤森

いや、ゴシックにはこういうデザインが多いものだから。そうか、星なんだあ、なるほどねえ。施主にはそういったんだろうなあ……。

増田

オーナーにはわかりやすいですものねえ。



阿川

そこでそんなに感心されても（笑）。建築家って不思議ですよ（笑）。はい、次は一橋大学の兼松講堂。



増田

これはさっき藤森先生が神戸女学院のヴォーリズの建物と似ているとおっしゃったものです。

藤森

これはきれいに修理されましたね。OBたちのお金で。

増田

伊東忠太の作品で、写真だとわかりにくいのですが、近づくと動物みたいな像がいっぱい付いています。



藤森

動物というか、怪獣とか妖怪みたいなやつね。外側は全部ロマネスクからの引用ですが、内部のものは自分でつくったそうです。つまり自分の作品を外に出さなかったということが伊東さんの謙虚さの表れかな。

増田

続いては求道会館。これは仏教寺院です。

阿川

中はお寺と教会が混ざったような感じですね。



藤森

仏教青年運動みたいなのをやっていた団体がつくったものですね。

鈴木

この建物ができた当時は本願寺を中心に仏教の改革が進んでいて、その推進者のひとり

が青年を集めて組織をつくり、説法するために建てたのがここなんです。だから祭壇があり、教会のような内部で仏教の教えを説いたのではないのでしょうか。

阿川

続いては大倉山記念館です。

藤森

新幹線で横浜に向かうと多摩川渡ってすぐの右側に見える山にある建物で、世界の五大宗教をひとつにまとめたといってつくったものです。大倉精神文化研究所ってのはちょっと不思議でね。

鈴木

長野宇平治の設計ですが、天井は木造っぽいかたちだし、その下の支えは木組みだし、柱はクノッソスの神殿からとってきたと思われるし、当時の建築家のありとあらゆる教養を組み合わせてつくったという不思議な建物です。

阿川

デザインとしてはどうなんですか？

藤森

他の人がやったらもっとめちゃくちゃになっちゃうでしょうね。ここまで変なことやって大丈夫だというのは、長野宇平治の古典的教養がすごかったということなんじゃないでしょうか。

鈴木

長野宇平治のいちばんの代表作は、日銀本店の三井側の増築部分です。ああいうしっかりした建物をつくれる人だから、こうしていろんなものを組み合わせ、怪しいなあと思ってもケチのつけられない建物になったんですね。

藤森

長野さんは最初、日本の建築もヨーロッパと同じように歩まなければいけないと強く主張していたんです。しかし晩年になって日本的なものに惹かれこれをつくりました。辞世の句ってのがあってね、「アテネより 伊勢にと至る 道にして 神々に出会い 我名なのりぬ」というん



ですが、ギリシャから帰って日本文化の象徴である伊勢に行く途中で神にあい、自分の名前を名乗ったということなんだけど、彼は漱石の同級生でもあり、近代化とは何か、非常に悩んだんです。そして最初はヨーロッパと同じに歩もうとしながら、最後は日本に戻った。もっとも、この建物のどこが日本なんだという気はするんですけどね（笑）。正面に神社と同じ鏡が付いているものの、ちょっとわかりにくいなあ。

鈴木

夏目漱石は建築家になりたかったらしいのですが、同級生に長野宇平治がいたものだから、彼には勝てないとあきらめたそうなんです。そんな人でした。

阿川

それだけの天才だったんですね。

鈴木

もっとも夏目漱石はコンプレックスが強い人間だったので、ちょっとでも勝てない人がいると、すぐ逃げちゃったんですけどね（笑）。

あと長野宇平治はすごい美男子で、男の人ですら彼を見ると、はっとしたそうです。

阿川

すいませんが、先ほどの六角形の話といい、建築家と顔は何か重要な因果関係があるんですか？

鈴木

いや、そうじゃなく（笑）、そういう話が伝わっているということ。

藤森

雑談ついでに言えば、長野宇平治は日銀の建築部にいて、彼の給料袋だけは立ったそうです。それだけ高給取りだったんです。

阿川

大物だったんですね。それでひとつお聞きしたいのですが、ホールをつくるというのは建築家にとって大仕事だったんですか？

藤森

そうですねえ。

阿川

するとそこで、自分の教養とか技術とかを披露したくなる？

藤森

今の人はそんなに知識をひけらかさないが、当時はいろんな歴史的なことを知っているというのは重要だったんでしょう。ギリシャから、長野さんの場合はその前のプレヘレニズムというちょっと特殊な時代のものまで詳しくだったので、ここまでやった人は世界でも少ないでしょう。下すぼまりのクノッソスの柱とか。



鈴木

クノッソス方式は20世紀初頭に流行らなかったわけではないので、海外にはいくつか例がありますね。

阿川

では続いて、横浜市開港記念会館。

増田

ここはちょっと前に改修して屋根のドームが再現されました。

先を急ぎますので、次に信州大学の繊維学部講堂を。



阿川

中は和風ですね。

増田

そうですね。次は静岡市議会議事堂です。

鈴木

ここは塔がきれいなんだよね。最初の函館の建物みたいに色づかいがすばらしく。

増田

アラビア風というかスペイン風というか、ちょっとめず



らしいスタイルですね。設計者の中村與資平さんは豊橋の公会堂も手掛けている人ですが、驚をつけたり、割と派手なデザインをつくっています。

鈴木

中村與資平さんは、古典主義建築の権威であるウィリアム・チェンバースという人の本も訳していて、ものすごい学者でもあったんですね。

増田

静岡の人ですか？

藤森

そうそう。大地主の息子で、最後は静岡県の教育委員長をしていたはず。



増田

続いては京都の南座です。歌舞伎座を出したのでこっちも紹介しましたが、中が桃山風というか御殿風というか、けっこうおもしろいです。

阿川

次は大阪市中央公会堂ですね。

増田

設計は岡田信一郎さんです。



藤森

岡田さんの原案に辰野金吾が手を入れたものですね。コンペをやり、辰野さんが審査委員長だったものだから、長野宇平治なんかは参加しなかった。なぜかという、いいものを出すと、先生が自分の作品にしちゃうからです。

阿川

とっちゃうの？

藤森

とっちゃうというより、自分で手を入れて好きなようにしちゃうんです。まあ、



それも無理のないところもあって、辰野先生から見れば世の建築家はみんな自分の教え子なんです。だから昔を思い出して、つい手を入れちゃうんでしょうね。

で、岡田信一郎さんはそれは覚悟していたみたいですよ。

ところで、この中の壁画ですが、日本神話なんだろうけどどんなシーンなんですかねえ。

阿川

因幡の白兔ではなさそうだけど（笑）

藤森

いろいろ飛んでるんですよ。降りてきたときかなあ。

鈴木

国生みのときではないですか。



藤森

そうかも。

増田

次いきます。

神戸市立の御影公会堂で、ここは灘の白鶴酒造の寄付によって 1933 年に建てられたものですが、今回撮影したなかで、いちばん状態はひどかったですね。特に内部はボロボロでした。



阿川

使っていないんですか？

増田

いや、今でも使っています。ただ、たとえば緞帳にマークがあったので、管理している人に「これは御影のマークですか？」と聞いたら、御影高校ののだといわれ、学校でいらなくなったものをおさがりでもらっていたらしい（笑）。しかも 2 階は危ないから上がらないようにとか、



そんな状態です。ただ、ホールの手前にいくつか部屋があり、そこはさまざまなサークルに使われているので、それなりに市民に愛されているようです。

そして次が神戸女学院の記念講堂です。ここはヴォーリズの設計で、今回、彼の作品はけっこうとりあげているのですが、ヴォーリズってのは建築家としてどういう評価をされているのでしょうか。

阿川

私の母校である東洋英和女学院もヴォーリズの設計でした。

増田

ヴォーリズのファンって一般にはたくさんいまして、最近も彼の設計した建物が大好きな人たちの会ができたとか、そういう動きがあるのに、どうも建築史の先生方の評価とのあいだに温度差があるんですね。

阿川

そうそう。建築家としてはボロボロにいわれるんですね。意匠がめちゃくちゃだとか。あいつは素人だ、とまでいわれる（笑）。

藤森

うーん……。なんともとらえがたい人なんですね。非常に悪いいい方ですけど、ヴォーリズをはずしても建築の歴史は一向に困らないというか、そんな感じかなあ。なんて表現していいかわからないのですが（苦笑）。僕らは建築を流れでとらえるので、位置づけに困る。

阿川

つまり、どの流れにも乗らないと……。

藤森

そうでもないですよ。日本にスパニッシュ形式を最初に持ち込んだ人ではあるし、影響も与えているんだが……。

阿川

瓦を使ってみたりね。



藤森

そうそう、スペイン風の瓦。阿川さんの母校もそうですし。ただまあ、彼は基督教の世界で仕事をしていた人なんですよね。宣教師は本業だし。

阿川

伝道師です！

藤森

そうそう。で、その資金を稼ぐために建築をやっていたわけで。

阿川

英語の教師をクビになっちゃったのでしょうかがなかったんですよね。

藤森

それもあと思う。そのへんが普通の建築家と違うというか。

阿川

ただ、お言葉を返すようですが、なぜ一般の人にヴォーリズが人気があるかという、中で過ごす人間や、そこで住む人間にはとても心地いい空間をつくってくれるからなんですよね。建築的にいい建物って、つくった人間は満足でも使う人にとっては不満足ということが多々あるわけで、その点、ヴォーリズはそこを使う人間が「気持ちいいなあ」とか「馴染むなあ」とか、そういうやさしさがあったんですね。ちょっと休む場所とかがあり、それが全体のデザインのバランスを崩すのかもしれませんが、ありがたいんですよ。たとえば階段の手摺りを丸くしてみたり、階段の一段目は低くしたりとかね。台所は低い位置に大きい窓をつくるとか。

なんで私がこんな必死にヴォーリズを擁護してるんでしょうか（笑）

藤森

建築家というか、建築界の中にいる者の立場でいうと、そういうところがなんか嫌なのかもしれない。

阿川

あ、嫌なの。失礼いたしました（笑）。鈴木先生はご意見ございますか？

鈴木

いや、やっぱり藤森さんの見方はすごいなあと思って。筋で見るとはですね。日本の建

築史の筋でいえば、たしかにヴォーリズがいてもいなくてもいいってのはその通りで、つくづく感心しました。

ただ、ヴォーリズの建築って、とにかく素直なんですね。彼自身が建築教育を受けて建築家になったわけではないし、藤森さんのいいたいことを僕がもっとあげつなくいうなら、金を稼ぐために建築をやっていたから、絶対トラブルは起こしたくない。そのためにはきちっとオーソドックスなアメリカの建物をつくり、変にいじくったりしない。だから、建物はできるのですが、そこに物足りなさみたいなものは、この世界の人ならみんな感じていると思うんですね。

阿川

建築家はみんなひねてらっしゃいますからねえ（笑）。ではヴォーリズの話はこのくらいにして、次にいきましょう。奈良女子大学記念館。きれいですね。富士屋ホテルみたい。

増田

いかにも女子大らしいかわいい建物ですね。今回、初めて中に入ったんですけど、上野の（旧東京音楽学校）奏楽堂なんかと同じように天井の中央部分が抜けているんですね。おもしろい空間だなあと感じました。



阿川

学校案内にこんな写真があったら、入学したくなっちゃいますね。

藤森

木造のゴシックは非常にロマンチックですね。ただ奈良だったらもっと和風でもよかったのかも。何年の建造ですか？

阿川

明治42年です。

藤森

じゃあ、そろそろ考えてもいい時期だねえ。

ただまあ、女子の学校という感じはして、これはいいと思いますよ。



増田

次は宇部市渡辺翁記念会館です。

阿川

これは近代的な感じがしますね。

増田

戦前のものとは思えないですね。

阿川

昭和 12 年、斬新！



増田

村野藤吾さんの設計で、これはすごいと思います。

阿川

日本が戦前でいちばんいいところですか？

藤森

いやあ、もうだいぶ傾き始めたころでしょうね。

増田

ここも東大の安田講堂と同じで周囲にマンションだらけで、この場所でしか撮れません。ただ、建物自体は保存状態もよく、今でも建築時の雰囲気は感じられますね。

続いて、これは今回唯一の和風建築で、鈴木先生がみつけてこられ、ぜひ入れましょうとなった琴平町の公会堂です。中がすごくで、正面に舞台があるのですが、逆に立派な床の間もあり、舞台上で講演を聞いたあと、うしろで宴会ができるというおもしろい構造になっています。

しかも、今でも現役の公会堂として多くの人に頻りに利用されており、保存状態もよくて、こういう建物のほうが使いやすいのかなあと思ってしまいますね。



次の活水女子大学講堂は今回撮り直しにいったのですが、真ん中に塔があったはずなのに、なくなってるんですね。

階段室でもないただの塔だったのですが。

阿川

そこだけ壊しちゃったんですか？

増田

おそらく、修復するときになくしてしまっただけでしょう。だから、写真撮ってもどこか引っかかるところがなく、いかなあという感じでした。中はそのままですが。



鈴木

これはさっきのハンマービームと並ぶ構造で、斜めの木がぶっちがいになっていてハサミみたいなのでシザーズトラスといいます。ハンマービームとシザーズトラスは、木造で大空間をつくる基本手法ですね。

増田

以上でスライドは終わりです。

阿川

ありがとうございました。

藤森

増田さんがおっしゃるほどひどくはなかったじゃない。どこもけっこうきれいに撮れていたし。



増田

それは写真でそう見えるように撮っているだけで、実際にはかなり厳しいものもありましたね。いちばん問題だったのは大倉山で、ここでは天井しか撮っていませんが、下の階段には手摺りを増設して二重になっているし、ホール内部もそんな感じです。そういうふうに撮るに耐えないものは多く、一般の人に利用してもらう以上、しょうがないのかもしれないですが、写真的にはかなり残念なことになっています。

阿川

藤森さんとして好きだったのはどれですか？

藤森

大倉山は好きだったけど、たしかに改修の仕方は問題があるよね。外はいいんだけど。

鈴木

僕はやはり改修の仕方にこだわりますね。できれば原形は崩さないほうがいい。この点、星薬科大学は30年前に見たときとあまりイメージが変わっていません。

阿川

学校のホールは残されやすいんですか？

藤森

大事にはされてるよね。シンボルだから。星薬科大学は階段でなく斜路があるよね。たしか設計したレーモンドは、世界で最初に斜路をやったのは自分だといっていたはずですよ。

阿川

こういう歴史あるホールから、今の若い建築家が学ぶものはあるのですか？

藤森

ないですよ。

阿川

そんなにはっきりいわなくても（笑）
ないんですか？



藤森

ないない。だって、今の建築は全然違う原理でつくられますから。学びようがない。

阿川

それじゃ、検証してもしょうがないじゃないですか。

藤森

なんともいいにくいことなんだが、建築の原理がまったく違いますからねえ。設計上は完全に切り離されている。

阿川

そうなんです。でも、デザインとかは参考にできるものもありませんか、鈴木先生。

鈴木

藤森先生がそういうんだからそうなんですよ（笑）

阿川

それでも、アイデアとか、心意気とか、哲学とか、なんかないの？

藤森

心意気ねえ。たしかに、そういう人もいたんですよ。村野藤吾さんとか。でも、ああいう人たちが最後でしょ。歴史的なものから学んだのは。

阿川

前回、駅舎とホテルの話をしたときに印象に残っているのは、今の（画一化された）駅は子供たちが誰も絵に描かない。というか、絵にならない。昔の駅はそれぞれがもっと個性的だったという話だったのですが、そういう意味では地域の「顔」にはなっているんですよ。

藤森

たしかに、最近のホールはそういうインパクトには欠けるよね。

鈴木

ただ、ホールの魅力は中にあるので、サントリーホールにしる渋谷の Bunkamura にしろ、それぞれ個性あるデザインにはなっていると思います。ですから、そういう設計をしたい人にとっては、歴史的建築物から学ぶものは多いんじゃないでしょうか。

増田

こういう歴史的建築物からは、その周囲を含めた空間づくりについて学んでほしいですね。というのは、多くの建物は公園などと共存するようにつくられていて、ここで音楽を聴いたらそのあとちょっと散策して余韻にひたれるよなあ、とか、そういう工夫があるように思います。残念ながら、今のホールは、音響効果や内装はよくできていても、そこまですごいと感じられるものが少ない。そういう意味では、やはり多くの建築物を回り、感性を豊かにして行ってほしいですね。海外では、まだそういう努力をしているのですから。

阿川

ありがとうございます。時間もずいぶん経ってしまいましたが、ずっと発言の機会がなく、寂しい思いをさせてしまった小澤さん、古い建物を残す手段についていろいろアイデアを紹介されているそうで、お話しいただけますか。

小澤

わかりました。

今回の本では第三章である作り話をしているのですが、テーマは、どうやって魅力ある建物を残していくかという点です。そのために必要な制度や、お金を集める仕組みについて考えてみました。

ストーリーは、市の公会堂が壊されるという話があったとき、弁護士と公認会計士、建築士の3人が集まり、保存の方法を考えていくという内容です。

昔の建物は美しくて魅力的で、なんとか残したい。それは多くの人が望むわけですが。一方で現実にはどんどん超高層ビルが増え、それは便利だがつまらなくなりました。では、なんで魅力的な建物がなくなってしまうのか。

ひとつの理由は個人よりお金持ちの会社が経済原理に基づいて活動するため、保有する建物は少しでも床面積を広くし、収益性を高めようとするからです。このため、遊びをする余裕がない。これはある意味当然です。株主の利益を追求しなければなりませんから。

しかしここで少し発想を転換し、株主の利益を追求するだけが会社の目指すことではないのではないかと考えてみたいと思います。社会貢献の一環として、人々が魅力的だと感じる歴史的な建物を守ってもいいのではないかと。そういう選択も評価できる環境にしたいのです。

もっとも、これは実際にはかなり難しい問題です。今の制度のもとでは、会社が「この建物の保存に協力したい」と思っても、そのための寄付をするのは簡単ではありません。

これは建築物保存だけでなく、たとえば大震災があったとき、住民支援や街の復興のために会社が10億円くらい寄付できるかということ、必ずしもそうはいかないんですね。株主の利益に反する行為だとして、経営者には背任のリスクが生じるからです。

もちろん、企業は社会的な存在ですから、こういうケースはあってしかるべきなのに、今まであまり議論されていないテーマでした。株主の経済的利益だけでなく社会の利益になることをやっているのか、はっきりした結論は出ていないのです。

しかし、どうなのでしょう。たとえば、ここに容積率500%の土地があったとき、会社はその数字いっぱい建物をつくらなければいけないのか。そうしないと株主の利益に反するとして糾弾されるのか。もっと違った観点で、魅力的な建物を守って社会に還元することはできないのか、そこを考えていきたいです。

重要なのは、個人よりも圧倒的にお金をもっている企業に、魅力ある建物を守ってもらう方法を考えようということです。

阿川

そんな方法があるんですか？



小澤

あります。

ただその前に、現在の古い公会堂を残すのと、新しく大きなビルの公会堂に立て直すのとどっちが費用対効果にすぐれているのか、ちょっと分析してみましょう。

まず利用度予測は、建物を新しくしたほうが有利だと思います。次にコストですが、建て替えは最初に建築コストがかかるものの、設備が新しいだけにそのあとの維持・運用コストはかなり少なくできます。一方、古い公会堂はメンテなどのコストがかかりますから、長期的にはあまり変わりません。そのほか、安全性や歴史的価値といった項目を無理やり点数をつけて評価していくと建て直したほうの点数が若干高くなるといったこともあるでしょう。もし歴史的価値の評価をもっと加重すれば、逆転するかも知れません。

もちろん、こんな数字を並べても意味はないんじゃないかという意見もあるでしょう。しかし、何かの計画を立てるときに客観的な比較は必要ですから、ひとつの方法として提示しました。

つまり、ここで私がいいたいのは、どの建物を残せばいいのかということ客観的に判断するのは非常に難しいということです。どちらを選択しても、全員が満足できる結論にはならないのです。

それでは次に責任という問題について考えてみましょう。責任には法的なもの、それを超えた人間としてのものの2つがあると思います。

法的責任とは不完全なもので、これは弁護士をやっているとよくわかりますが、法律をつくるときにはいろいろな事態を想定します。しかし、たいていの場合想定外のことはいっぱい起きるわけで、完全にフォローすることはできません。それにも関わらず、法的責任だけを全うしていればいいという考え方は、やはりナンセンスだと思いますね。

ところが今の社会は、法的責任だけを果たしていればいいという風潮になっていないでしょうか。その結果、「これでよろしかったでしょうか？」と自らの責任をとる範囲を限定してしまう、責任回避システムになっているわけです。

そんな中では、地震に弱い建物をもっているなんてリスクでしかありませんから、取り壊してしまえとなる。法的責任だけを考えると、当然、そうなるはずですが、歴史的建造物を残すには、そうならない法的仕組みをつくらなければなりません。

あと、今の日本の制度では、重要文化財や登録文化財などに指定または登録されると、かえって損をしてしまいます。したがって、この部分も、保有者が得をするように変えなければなりません。



そして重要なお金の話です。

先ほど、どの建物を残せばいいか客観的に判断するのは難しいという話をしました。ですから、ここは、その建物を残したい人が自分でお金を出すシステムをめざすべきではないかと思います。

日本の場合、これまですべて税金として徴収し、それを国家や自治体が社会に還元していくという制度でした。しかしイギリスやアメリカなどは少し違うんですね。寄付により民間が公共公益活動を行うことが可能になっている。公益性のある事業が個人の寄付によってもまかなわれます。

日本でも最近は、財団法人や社団法人が役所の方にばかり目を向けるのではなく、そうでないかたちにしようという動きがありますが、まだ税金と寄付をミックスするまでには至っていません。でも、何を優先すべきか難しい分野では、寄付の活用が有効です。特に日本のように個人のお金持ちが少ない社会では、会社や団体にその役割を期待するのは当然でしょう。

阿川

容積率を買うというのは、その具体的な方法ですね？

小澤

そうです。

日本には容積移転制度がありますが、まだ限定的で、広く使われているわけではありません。理由のひとつは、容積を飛ばした先で都市計画にどう対応していくかが難しいからです。

阿川

容積移転というのは、本来の容積率より小さい建物をつくるということですね。

小澤

そして、余った分の容積を他の土地で活用するという制度です。

ですから、歴史的建造物のある土地は低い容積率になるが、その分を売買して転用することで、不利な面が解消されます。

ただ現実に難しいことは、余った分を飛ばした先で、その都市計画に合った建物ができるかということです。他からもってきた容積を使って1カ所だけ高い容積にしたらトラブルになりますからね。

したがって、今回の私の提案は、容積移転の話とは全く異なっています。私の提案は、



どの土地でも自治体が本来許される容積率の5%を売れるというものです。

たとえば100%の容積率だった土地に、5%の割増分を自治体が売ることを認めるのです。

今、ある土地で容積率を超えて建物をつくりたい場合、公開空地といって、みんなが利用できるオープンスペースを設けたらその分ボーナスの容積率をあげますよといった制度があります。でも今回の私の提案ははそうではなく、5%まで容積率を増やしていいが、その分はお金を払いなさいということです。そしてそのお金もその自治体にだけでなく、街づくりに力を入れている一定の要件をみたす団体に払ってもいいということにしました。

この図でいえば、港区の表参道あたりの土地でデベロッパーが5%容積率を増やしたい場合、その5%の代金分を、港区ではなく、街づくりにがんばっている団体、たとえば松本市の松本城の景観を守る団体に払えるのです。

ここで松本市をあげたのは、たまたま先日、興味深いケースがあったからなんです。ある外資系企業が、もともと勧銀のもっていた建物と土地を買った。しかしそれは歴史的建造物だということで保存運動が行われていたのです。するとその外資は「保存をしてもいいが、自分たちはそのうしろにホテルを建てたいので、周囲は5階建てのビルまでしかないが8階建てを建てる」と言い出したのです。しかし、それでは松本城の周辺の景観が破壊されるので、景観保存運動をしている方のひとりが相談を持ち込んだのです。

これも難しい問題で、歴史的建造物保存のためにはそういう措置も必要でしょうが、うしろに8階建てのホテルが建ってしまうと景観は乱れるのですから、それにも反対運動が起きる。なかなか解決策が見いだせません。結局は、誰かがお金を出して土地を買ってしまうしかないんですね。

そんなとき、こういう制度をつかって松本城の景観を守る団体にお金を払えれば、不可能ではないのです。

阿川

これは小澤さんの私案ですか？

小澤

そうです。勝手なアイデアですが、解決先のひとつとして検討の材料にさせていただきたいと思い、提案しました。

阿川

鈴木さんはこの考え方についてどう思われますか？

鈴木

けっこうではないでしょうか。

僕は今、東京中央郵便局の建物をなんとか残したいと考えているのですが、小澤さんの



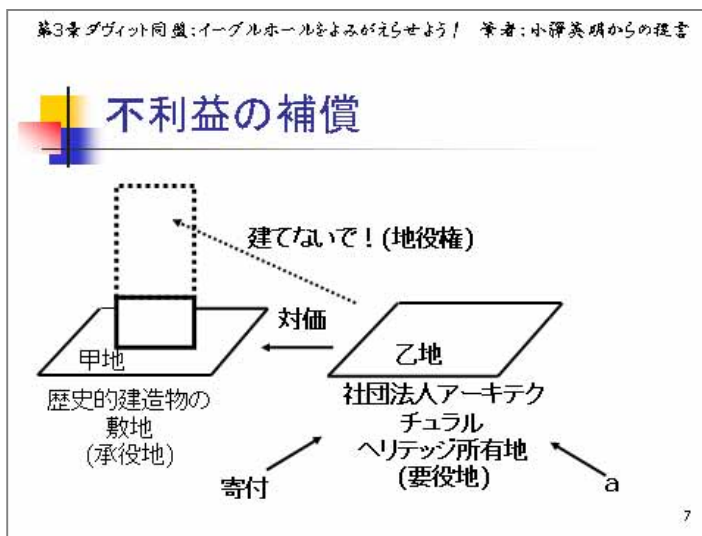
お話は「ふるさと納税」に通じるもので、価値があると思いますね。

小澤

アイデアとしては僕のほうが先なんです(笑)、たとえば中央郵便局であれば、その保存運動をしている団体に資金が回るようにすれば、残すのは可能なんです。

阿川

港は文句はないんですかねえ。



小澤

それについては、本来、入るお金ではないのだから理解いただくしかないんですね。

鈴木

僕もうまく活用できればいい制度だとは思いますが、この図式でいえば、港区は本来、都市計画に基づいて決められた容積率以上の建物をつくれちゃうわけで、当然、その分、過密さが増し、行政サービスの負担が増えることになります。しかし果実にあたる部分はよそにいっちゃうので、そのあたりをどう解決するか決めないといけませんね。

小澤

そうなんです、ただ容積率というのは案外あいまいなもので、これまでもケースによっては大きな容積率をばーんと与え、それによって町が発展してきたという歴史もあるわけです。それならもっといろいろな方法があってもいいのではないかと。公開空地を設けたから容積率をあげるというだけでなく、こういうやり方もあるといいなと思ったのです。

阿川

藤森先生は?

藤森

5%ぐらいならその土地にもそれほど大きな圧力は与えないような気はしますね。

小澤

都会の土地であれば経済的な効果は大きいわけで、それをなんとか景観づくりに活かしてほしいなあ、というのが私の思いです。

また、小さな規模で考えれば、住宅でも可能だと思うのです。たとえば 50 坪の土地で容積率が 150% だった場合、「もうひとつ部屋がほしい」という要求に対して応えることで小さなお金でも社会に還元できる。そんな方法もあるでしょう。

増田

5% ぐらいで保存運動への効果はありますか？

小澤

5% はあくまでお金を集める側の話で、このくらいなら影響は少ないだろうと考えた数字です。一方、使う側、つまり歴史的建造物を保存したいという地域では、そうやって集まるお金を建物の持ち主への不利益の補償にあてれば解決も可能だと考えました。そのためには、保存運動に携わる団体が「こんな事業をしているので資金が必要だ」と積極的にアピールをする必要がありますが。

不利益の補償についてですが、地役権という制度も利用したらよいと

考えます。たとえば、そこに 1000% の容積率があるのに 500% の古い建物をそのままにしておけば、本来の収益が得られないという不利益が生じます。これに対し、保存したいと運動を進める団体は、他の地域の割増容積率の売却分や企業などからの寄付を受けて不利益の対価となる金銭を提供し、その土地の所有者と合意ができれば建て替えないことを約束させることができる。このような権利は地役権と呼ばれ、設定可能です。でそういう仕組みにしたいと考えているのです。お金さえあれば、他の土地の利用を制限することは可能なんですよ。

阿川

発想の転換ですね。たしかに残したい建物があるときには、ひとつの解決方法になるのかもしれませんが、ありがとうございました。

それでは最後に、みなさんに一言ずつお願いします。

藤森

先ほど、なぜ現在の建築はこういう歴史的建造物から学べないのかと聞いてしまい、その理由を考えていたのですが……。たしかに原理が違うといっても、人間の考えていることはそんなに変わらないのですから、なぜ学ぶことができ



ないのか。

阿川

結論は出ましたか？

藤森

いや、まだ考え中です（笑）

阿川

そうですか、では考えといてください
（笑）



鈴木

僕は今日、素直に増田さんの写真を見せていただき、やはり日本の建築は捨てたものじゃないなと思いました。いい建物ってある意味、無駄な努力をしているのですが、それは実は無駄ではなく、こうやって魅力として伝わっていくんですね。

最近は超高層ビルってめずらしくなくなり、昔は建っただけで見学に行ったり覚えていたのに、今は区別ができない。それは決して数が増えただけではないと思うんですね。

コストとしてはものすごいお金がかかっているのに、全部、区別がつかないものになっているからそうなので、そういうのになんかもったいないような気がします。せっかくお金をかけているのに人の心に訴えてこない。

だから、こういう歴史的建造物を見て、みんなももっとがんばれよと思う。必要以上の努力をして、記憶に残るようにしてほしい。そういう意味では、学ぶことはたくさんあるように思いますね。メッセージはあったんです。

小澤

残したいものはいろいろあるのにどんどん壊されていくなかで、工夫の仕方はあるのではないのでしょうか。みんなが自然に従いたくなるような現実的なルールを考え、「残らなくて残念」と思わないで済むようにしたいですね。

阿川

小澤さんのお話を伺っていて思ったのですが、どこかに残したい人がいて、どこかにそれを支援したい人がいるのに、その両者がなかなか合致しないんですね。これだけ情報が発達しているのに結びつけることができない。それは本当に残念なことですから、ご提案いただいたような制度で赤い糸がうまくつながればいいですね。

増田

僕はこれまであまり深く考えずに写真を撮っていたのですが、そこで感じたのは、予算がないせいでどんなにボロボロになっている建物でも、そこにいる人はとても誇りに思い、大切にしているということなんですね。愛着をもっている。

それにもかかわらず、こういう建物はほとんど取材も受けないらしく、「建物の写真を撮りたい」と申し込むと、ものすごく歓迎されるんです。

阿川

電気代払えといいながらも（笑）

増田

そうです（笑）

各ホールとも厳しい予算で運営しているものですからコーヒーなんかは出ないのですが、その分、お茶は何杯でも出してくれる。

撮影中に何度も顔を出し、その建物の歴史を話したくてしょうがないという感じが感じられて、愛されてるんだなあと非常にうれしく思いました。

阿川

ありがとうございました。

最後にちょっと暗い話になってしまうかもしれないのですが、私がかつて報道の仕事をしていたときにいろいろな人に話を聞いていたら、たとえば自殺してしまいたくなる気持ちというのは、この世に自分が必要ではないと思ったときに生まれるのですね。逆にどんなに厳しい環境にあっても、他の人に必要だと思われていると感じれば、そういう衝動は起きないのです。

建物も同じで、みんなが必要としていれば管理している人も一生懸命になるし、結果として保存に結びつく可能性が高い。だからもっと関心をもっていただきたい。そう思いました。

本日は長時間おつきあいいただき、ありがとうございました。



